

# 『大智度論』における法華經の把握

望 月 海 淑

1

法華經と『大智度論』との関係については古来、沢山な学者によって研究がされ来っている。『大智度論』は竜樹造、鳩摩羅什訳出として伝えられ、『摩訶般若波羅蜜經』に対する逐語訳の型をとっているが、『大智度論』がそのまますべて、竜樹によって書かれたものかどうかについてさえ、疑問が持たれるに至っている。

すなわち、干潟竜祥教授は『大智度論』の内容を検討した結果、A、竜樹の言とは思われないもの。(1)明かに竜樹の言ではなく、訳者羅什の言と思われるもの、(2)「明かに」とまでは云えなくとも、「恐らく」竜樹の言ではなく羅什の言と思われるもの。B、ここは竜樹の言に相違ないという特色のはっきりしているもので、竜樹以外の者少くも印度外の羅什の如き者の言とは思われないもの。C、これはAではない、然しBとすべき特色も見られない部分、即ち何れとも特色の明かでない部分、ここは致し方ないから伝の通り竜樹のものとしておかざるを得ないもの。というように分類し、漢訳に際し羅什が加筆した部分のあることを指摘している、などである。

『大智度論』を訳出した翌年に『妙法華經』を訳出した羅什の態度としては、この両者に対する関連を見ることが出来るのであるが、もし然りとすれば、竜樹と法華經という関連では一考を要さなければならぬであらう。

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』の中に引用されている法華經の語句の引用についての研究はすでに行なわれているところであるが、<sup>(3)</sup>今は、この兩者の関連をしらべ、更に梵文法華經における表現を摘し、それにより『大智度論』が見た法華經、法華經の説示をどのように『大智度論』がとらえているのかについて考えてみることになるであろう。

〔註〕

- (1) 千鶴竜祥「大智度論の作者について」(『印度学仏教学研究』七ノ一)1~2。この外塚本啓祥教授は、その論文の中で、モット教授の説を詳細に亘って紹介している。「大智度論と法華經」(坂本幸男編『法華經の中国的展開』)六四〇~六五七。
- (2) 『大智度論』訳出は後秦弘始四~七年、『妙法華經』訳出は姚秦弘始八年とせられている。
- (3) 『大智度論』と法華經に關しての論究として、山川智応『法華思想史上の日蓮聖人』四三七~四四四、勝呂信静「インドにおける法華經の注釈的研究」(金倉円照編『法華經の成立と展開』)三六五~三七四塚本啓祥「大智度論と法華經」(坂本幸男編『法華經の中国的展開』)六一一~六六〇、等がある。

2

(1) 『大智度論』卷七には、

復次有諸仏無三人請者。便入涅槃而不說法也。如法華經中多宝世尊。無三人請故便入涅槃。後化仏身及七宝塔。証說法華經一故。一時出現。<sup>(1)</sup>

とある。これは『大品般若經』の「能請無量諸仏」の句を釈したもので、請うのには二種があるとし、一は仏の初成道の時で、二は諸仏が無量の壽命を捨てて涅槃に入らんと欲した時だとしている。そして諸仏が目前にいる時は請えらるが目に見えない時は請えないとし、諸仏の法は必ず応に説法して広く衆生を度すべし、請うと請わざるとにせよ、

法として自ら応に爾るべし、何を以てか請うを須たんや、との質問に対して、諸仏は必ず説法し、人の請を待たずと雖も、請う者は亦応に福を得べし、請う者なき場合は涅槃に入ると語って多宝如来 Prabhutaratna-tathāgata に言及したものである。

『大智度論』の多宝如来への言及は要旨を語ったものであるが、妙法華經によると、多宝如来は、

於<sub>(3)</sub>三<sub>(3)</sub>塔中<sub>(3)</sub>坐<sub>(3)</sub>師子座<sub>(3)</sub>。全身不散如<sub>(3)</sub>入<sub>(3)</sub>禪定<sub>(3)</sub>。

と表現され、仏と成り滅度した後、十方の国土において法華經を説く処あらば、わが塔廟はこの經を聴かんがための故に涌現して、ために証明をなして讚めて善哉といわん、との誓願 Prāṇidhāna を作し、多宝如来の身体を人に示さんとする時、その時の仏は分身仏を十方世界から集めよ、との誓願があつたことを示している。梵文法華經はこれに關して、多宝如来は、

siṃhāsanoḍḍaviśiṣāḥ paryāṅkam baddhvā paṇḍuśka-gātraḥ saṅghaṭṭita-kāyo yathā samādhī-samāpannas  
tathā sandṣyate sma<sub>(6)</sub>

(獅子座に坐り、足をくみ、四肢は干からび、全身は不散で、禪定に入っているかのように見えた。)

であつたとして、法華經が説かれる時、その時に多宝塔が出現し、善哉と証明し、諸仏が多宝如来の身体を四衆に示そうと欲する時には、十方世界の如来の分身 tathāgata-vigraha を集めなければならないことを示している。<sub>(7)</sub>

しかして、四肢が干からび全身不散であるという時、それは全身の舍利を意味するであろうから、滅度した仏であることになる。『大智度論』により「便入涅槃」といわれるところであるが、法華經が説かれる時、涅槃の後であっても、誓願によって出現し証明法華經するというから、多宝如来は入涅槃しているのではなくて、塔の中から音声

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

放つて大衆に呼びかけているから、現在している仏陀である、とも考えられる。「滅度之後」と妙法華經が訳出しているのに対し、梵文法華經は前世において菩薩行を修行したが、教菩薩法仏所護念の妙法蓮華の法門を聞かない間は、決して無上等正覺に達しなかった、<sup>(9)</sup>としているから、妙法華經、「便入涅槃」とした『大智度論』とは異っている。しかし、干からび全身不散という時、實質的には涅槃を意味するから、妙法華經がいう誓願力、梵文法華經のいう法華經を聞くまで、という働きが現在している仏という意につながるであろう。このことは活動せずして、しかも現在している仏、法身仏たる多宝如来を表現したことを示したものと思われる。しかし、妙・梵両法華經とも法身の何たるか、多宝如来が法身仏であるのかについて、言明をしているわけではない。

『大智度論』は、仏法は等しく衆生を觀て、貴なく賤なく、輕なく重なく、人の請う者あらば、その請のための故に、便ちために法を説くとし、

雖<sub>レ</sub>衆生不<sub>レ</sub>面<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>仏。仏常見<sub>レ</sub>其心亦聞<sub>レ</sub>彼請。假令諸仏不<sub>レ</sub>聞不<sub>レ</sub>見。請<sub>レ</sub>仏亦有<sub>レ</sub>福徳。<sup>(10)</sup>

としている。すなわち、仏法が請に應じて法を説くことあるを示しているが、仏法が法を説くことそれは法身仏の説法であり、多宝如来がそのように理解せられたことを意味するであろう。しかも、衆生は目前に仏を見なくとも、仏に説法を請う心が大切なことを示しているから、仏が法として遍在することあることを意味しているであろう。

(2) 『大智度論』巻九は、

如<sub>レ</sub>大月氏西<sub>レ</sub>肉髻住<sub>レ</sub>処國。一<sub>レ</sub>仏<sub>レ</sub>圖<sub>レ</sub>中有<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>頼<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>病。来<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>遍<sub>レ</sub>吉<sub>レ</sub>菩薩<sub>レ</sub>像<sub>レ</sub>辺。一<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>婦<sub>レ</sub>念<sub>レ</sub>遍<sub>レ</sub>吉<sub>レ</sub>菩薩<sub>レ</sub>功<sub>レ</sub>徳。願<sub>レ</sub>除<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>病。是<sub>レ</sub>遍<sub>レ</sub>吉<sub>レ</sub>菩薩<sub>レ</sub>像。即<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>右<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>宝<sub>レ</sub>髮<sub>レ</sub>光<sub>レ</sub>明。摩<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>病<sub>レ</sub>即<sub>レ</sub>除<sub>レ</sub>愈。復<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>中有<sub>レ</sub>阿<sub>レ</sub>蘭<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>比<sub>レ</sub>丘。大<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>摩<sub>レ</sub>訶<sub>レ</sub>衍。其<sub>レ</sub>國

王常布<sub>レ</sub>髮令<sub>二</sub>蹈<sub>レ</sub>上而過<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>一比丘<sub>二</sub>語<sub>レ</sub>王言。此人摩訶羅不<sub>二</sub>多説<sub>レ</sub>經。何以大供養如<sub>レ</sub>是。王言我一日夜半欲<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>此比丘。即往<sub>三</sub>到其住处<sub>一</sub>。見<sub>二</sub>此比丘<sub>二</sub>在<sub>三</sub>窟中<sub>一</sub>讀<sub>三</sub>法華經<sub>一</sub>。見<sub>下</sub>一金色光明人騎<sub>二</sub>白象<sub>一</sub>合<sub>レ</sub>手供養<sub>上</sub>。我軼近便滅。我即問<sub>二</sub>大德<sub>一</sub>以<sub>二</sub>我來<sub>一</sub>故。金色光明人滅。比丘言。此即遍吉菩薩。遍吉菩薩自言。若有<sub>レ</sub>人誦<sub>三</sub>説法華經<sub>一</sub>者。我當<sub>レ</sub>乘<sub>二</sub>白象<sub>一</sub>來教<sub>レ</sub>導<sub>上</sub>之。我誦<sub>三</sub>法華經<sub>一</sub>故遍吉自来<sub>上</sub>。

と法華經に言及している。これは、今、此の衆生は多く三惡道の中に墮つ。若し十方無量無辺の諸仏及び諸菩薩あらば、何を以てか来らずや。との質問に對したものである。これに對し『大智度論』は、衆生は罪重きが故に諸仏菩薩が来ると雖も見ず。又、法身仏は常に光明を放ち常に説法しても、罪を以ての故に見ず聞かず、として、衆生の心清浄ならば、則ち仏を見、若し心不浄ならば則ち仏を見ず。今実に、十方の仏及び菩薩ありて、来り衆生を度すと雖も、而も、見ることを得ず、とし更に、十方の仏が来らずは、衆生は罪垢深重で見仏の功德を種<sub>レ</sub>えざるを以て、であり、一切衆生の善根が熟し結使が薄らぐを知って、然して後に来り度すとすべ、その上で前掲のように法華經に言及した上で、人ありて罪垢の結薄く、一心に仏を念じ、信が淨く疑わざれば必ず見仏を得て、終に虚しからざるなり、と述べている。

すなわちこれは、見仏のあり方について述べたところであるが、見仏に關し『大智度論』は、普賢菩薩の功德と来至の挿話を使用して答えたことになる。

遍吉の訳語は Samantabhadra 普賢の訳であるが、<sup>(12)</sup> 妙法華經は、「有人癩風病」等に關して、若し後の世に於て、是の經典を受持説誦せば……所願虚しからざらん……

若復見<sub>下</sub>受<sub>三</sub>持是經<sub>一</sub>者<sub>上</sub>。出<sub>二</sub>其過惡<sub>一</sub>。若実若不実。此人現世得<sub>二</sub>白癩病<sub>一</sub>。<sup>(13)</sup>

『大智度論』における法華經の把握(望月)

とのべ、癩風病を白癩病とし、法華經の受持者を排謗する者がうける病であるとしている。そして、普賢が白象に乗りあらわれる所を、

是人若行若立誦誦此經。我爾時乘六牙白象王。与三大菩薩衆俱詣其所。而自現身。

と、供養し守護してその心を安慰せん。亦、法華經を供養せんがための故なり、と述べている。<sup>(14)</sup>

梵文法華經は、後の時機、後の時、後の五百年が時に、この法門を受持するであろう僧たち、……かの法師たちは素直であり、三解脱を得るであろう。現世、来世に彼等は成就をされるであろう。……

ye cāivam-rūpāṇām sūtrānta-dhāraṅkāṇām bhikṣuṇāṃ avarṇam saṃśrāvayisyanti teṣāṃ dṛṣṭva eva dharme kāyaś citro bhaviṣyati<sup>(15)</sup>

（このように述べられた經典を受持する僧たちの非難を聞かしめるだろう彼等は、現世において身体に癩病が生ずるであろう）

と述べ、更に、

yaḍā ca sa dharmā-bhāṅako 'smiṃ dharmā-parvāye cinta-yogam anuyuktaś caṅkramābhīrūḍho bhaviṣyati tadā'ham bhagavaṃs tasya dharmā-bhāṅakasyāntike śveta-śaḍ-dantaṃ gaḷa-rājam abhiruhya tasya dharmā-bhāṅakasya caṅkrama-kuṭim upasaṅkramisyāmi bodhisattva-gaṇa-parivṛto 'sya dharmā-parvāyasy' āraḱṣāya<sup>(16)</sup>

（その法師がこの法門について思索の行に専念し、經行所に登るであろう時に、世尊よ、私は六牙の王侯のような白象に乗り、菩薩の集団に囲まれて、この法門を護るために、その法師の經行所の庵に近づくとであろう）

と述べて、この法門から一句、一字でも見落すようなことがあれば、六牙の王侯のような白象に乗り法師の前にあらわれて、この法門を欠けるところなく発声させるであろう。かの法師は私の姿を見て、この法門を欠けるところなく私から聞き、満足し悦び歡喜し極喜し欣喜と愉悅を生じ、この法門に十分に精進をおこすでしょう、と述べている。

すなわち妙梵両法華經俱に、後者に関しては普賢菩薩の行願として法華經の法師に対しての守護を述べ、前者は、普賢の言葉聞いた釈尊が法華經を受持する者をそしめる人が受ける報いとして述べたものである。これに対し『大智度論』は、普賢(遍吉)菩薩がその(行願によつて)法華經を誦誦する人のところへ、金色光明の身をもつて自ら現われ、又、癩風を病める人が、遍吉菩薩に帰依をし念じたところ病除却したと述べているから、表現は法華經が示すものよりも一層積極的であることになる。そしてこれは見仏のあり方について述べたものであるから、仏の實在を信ずる心、心のあり方を示すために、法華經に対する受持の姿が用いられたのであろう。

(3) 『大智度論』卷十は、若し皆東方の諸仏を供養せば、諸仏は甚多し、何の時か当に詎つて此の間に來るべきや、との質問に対して、諸の菩薩は人天の法による供養をするのではなく、菩薩の供養の法を行ず、それは、身禪定に入つて、其の身を直進し、其の身辺より無量身を出し、種々な供養の物を化作して諸仏の世界に満たす、のだとしていゝ。そして、更に、此の諸の菩薩は釈迦牟尼仏に詣んと欲す、何を以つてか中道で諸仏を供養するのか、との問に対して、諸仏は第一の福田なり、若し供養せば大果報を得る、この故に供養するのだし、菩薩は常に仏を敬い重んずること、人の父母を敬い重んずるが如くで、菩薩は仏の説法をうけ三昧・陀羅尼・神力を得ているのだから、恩を知るが故に広く供養するのだ、として法華經に言及している。すなわち、

如<sub>レ</sub>法華經中藥王菩薩。從<sub>レ</sub>仏得<sub>二</sub>一切變現色身三昧<sub>一</sub>。作<sub>二</sub>是思惟<sub>一</sub>我當<sub>三</sub>云何供<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>仏及法華三昧<sub>一</sub>。即時飛到<sub>三</sub>天上<sub>一</sub>。以<sub>三</sub>三昧力<sub>一</sub>雨<sub>二</sub>七宝華香幡蓋<sub>一</sub>供<sub>レ</sub>養於<sub>レ</sub>仏。出<sub>三</sub>三昧<sub>一</sub>已意猶不<sub>レ</sub>足。於<sub>二</sub>千二百歲<sub>一</sub>。服<sub>三</sub>食衆香<sub>一</sub>飲<sub>三</sub>諸香油<sub>一</sub>。然後以<sub>三</sub>天白疊<sub>一</sub>纏<sub>レ</sub>身而燒。自作<sub>三</sub>誓言<sub>一</sub>。使<sub>レ</sub>我身光明照<sub>三</sub>八十恒河沙等<sub>一</sub>仏世界<sub>二</sub>。是八十恒河沙等<sub>一</sub>世界中。諸<sub>レ</sub>仏讚言。善哉善哉善男子。以<sub>レ</sub>身供養是為<sub>二</sub>等一勝<sub>一</sub>。以<sub>三</sub>國城妻子<sub>一</sub>供養百千万倍。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>以<sub>一</sub>譬喻<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>比。於<sub>二</sub>千二百歲<sub>一</sub>身然不<sub>レ</sub>滅<sub>(17)</sub>。

として、このように仏を供養すれば無量の利を得、この故に菩薩は仏を供養するのだ、としている。塚本啓祥博士によると、この部分は法華經の直接引用の状況で、妙法華經とは部分的相応關係を示す<sub>(18)</sub>とされているが、妙法華經は『大智度論』の文章よりも、はるかに詳述しており、梵文法華經は更に詳しい。今、紙数の關係もあり、その全文を紹介することが出来ないので、要をとって見ていくこととする。

法華經によると、この箇所は藥王菩薩の前身、一切衆生喜見菩薩 Sarvasattvapriyadaršana の焼身供養の場面であり、この菩薩が現一切色身三昧 Sarvarūpasanādaršana-samadhi を得たのは「皆是得<sub>三</sub>聞<sub>一</sub>法華經力<sub>一</sub>」imam Saddharmapūṇḍarikam dharmaparyāyam āgamya (この妙法蓮華の法門の故で)であるから、日月淨明徳仏 Candrasūryavimalaprabhāsari と法華經に供養しようとして三昧に入った。すると虚空 antariksa (空中)から華の雨がふり、三昧から立ち上った菩薩は、身を以って供養するに如かず、として、香を食し千二百年間 dvādaśa (十二年)も香油をのみ火をつけた。その光明は八十億恒河の世界 asitī Gaṅgā-nadī-vālikā-sama (八十恒河沙と同じ)を照した。この供養は第一の施、於諸施中最尊最上 viśiṣṭāgrā varā pravārā prañitā dharmapūjā (最勝、最高、最上、最善、上妙な法供養)で、國城・妻子を布施するよりも勝れたもので、その身体は千二百才 dvādaśa varṣa-



parahi (千二百年) 燃え続けて消えた。と。すなわち、妙・梵両法華経は数字の差こそ一部にはあれ、大よそ同一内容を示している。

而して『大智度論』の表現は、法華経を要約したものであることが知られるが、法華経が仏と法華経に対する供養としてゐるのに、論が法華三昧に対する供養となした理由は解らない。法華経は一切衆生喜見菩薩が仏と法華経のために焼身供養をなし、その供養が諸施の中で最尊最上であるから、薬王菩薩として現世に出現したことを説示している。『大智度論』が、薬王菩薩の焼身供養を語り、「如<sub>レ</sub>是供<sub>ニ</sub>養<sub>ニ</sub>仏<sub>一</sub>得<sub>ニ</sub>種<sub>ニ</sub>種<sub>ニ</sub>無量<sub>ニ</sub>利<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>是故諸菩薩供<sub>ニ</sub>養<sub>ニ</sub>仏<sub>一</sub>」<sup>(19)</sup>という時、仏に対する供養の心が如何なるものかを示さんとしたものと思われる。そして、釈尊に至らんと欲すのに、何故に中道で諸仏を供養するかとの問に対する答えでもあり、菩薩は諸仏を見て供養すれば仏たる果報を得るとなすから、釈尊と諸仏との関係について、釈尊の中に諸仏が含みこまれるのか、どうかは考えてみなければならぬ。

(4) 『大智度論』は卷二十六の中で、仏の滅度にふれて、若し仏衆生を度せんと欲して未だ息まざれば、何を以てか涅槃に入るや、との問を設け、その答として、衆生を度すに二種あり、或は現前の得度あり、或は滅後の得度あり、として、法華経の説示を例証に挙げ、

如<sub>ニ</sub>法華経中説<sub>一</sub>。薬師為<sub>ニ</sub>諸子<sub>ニ</sub>合<sub>レ</sub>薬与<sub>レ</sub>之而捨。是故入<sub>ニ</sub>涅槃<sub>一</sub>。復次有<sub>ニ</sub>衆生<sub>ニ</sub>鈍根徳薄<sub>一</sub>故。不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>大事<sub>一</sub>。但可<sub>レ</sub>種<sub>ニ</sub>福徳<sub>ニ</sub>因縁<sub>一</sub>。是故入<sub>ニ</sub>涅槃<sub>一</sub>。<sup>(20)</sup>

と述べてゐる。仏の現前の得度は当然のことであるから、法華経を挙げたのは滅後の得度に関するもので、薬師云々の語は如来寿命品の説示の良医の譬を意味している。すなわち妙法華経は、父(良医)の留守中に誤って毒薬を服し

『大智度論』における法華経の把握(望月)

天子等が、父の調合せる色香美味の薬を見て、不失心者は服したが、失心者は服しなかったので、薬を留めて旅に出  
て方便を以て父は死すと告げさせる、これを聞き失心者も父の言葉をうけ薬を服し癒えたり、という話を記し、父が  
仏であることを示している。<sup>(22)</sup>梵文法華經も同様の意を伝えているが、失心者について、viparita-samjīnīn（意識の  
顛倒）という語を使っており、偈文の「令顛倒衆生」については、viparita-buddhi ca nara vimūḍhaḥ（理性が顛  
倒し愚かな人々は）としている。samjīnīn buddhi の顛倒者は父（仏）が滅度の後にしか飲薬しなかった（不見）の  
であったことを示して、このような人々は愚かな人であるとしている。<sup>(23)</sup>これに対して父は、「良医智慧聡達。明練三方  
藥善治衆病」(vaidya-puruṣo bhavet paṇḍito vyakto medhavi sukūśalaḥ sarva-vyādhi-prasamanāya)<sup>(24)</sup>賢  
明で明晰で知的で立派で全ての病を癒す良医がいるとしよう）とせられるから、これは失心者とは相反するものであ  
る。『大智度論』が、鈍根にして徳薄きと称したのは、まさに失心者のことであり、この故にこそ福德の因縁を種え  
るために仏は涅槃に入るとせられたのであろう。

(5) 『大智度論』卷三十には、阿修羅は天に非ず人に非ず、地獄の苦多く畜生の形と異なるとし、五道の撰するところ  
だとし、更に、經には五道ありと説く、云何なれば六道とのかとの質問に対し、仏去つてから久しく經の流れ速  
し、法伝わつて五百年の後、多く別異あり部々同じからず、或は五道といい、或は六道という、若くは五と説く者は  
仏の經において文を廻して五と説き、若くは六と説く者は仏の經において文を廻して六と説くのだとし、

摩訶衍中法華經説レ有三六趣衆生。觀諸義旨二応レ有三六道。<sup>(25)</sup>

と述べて、六道説を示している。この句は説示のごとく法華經序品の

於此世界。尽見<sub>二</sub>彼土六趣衆生<sub>一</sub>。<sup>(26)</sup>

ye ca tesu buddha-ksetresu satūsu gatisu sattvāṅ samvidyante sma te sarve 'śeṣeṇa samdīśyante sma<sup>(27)</sup>

(この仏国土で六趣の人々が知られ、彼等は一切すべて見られた)

をうけたもので、法華經により六道説をとっていることを示している。

(6) 『大智度論』卷三十二には、經の三千大千世界の大地、諸山、微塵数を知らんと欲せば、般若波羅蜜を学すべし、の語をうけて、仏は何故に六度等の諸の功德を讚歎せず、大力を讚歎するのかの質問を設け、衆生には善法を楽しむ者と善法の果報を楽しむ者の二種があるとし、前者には諸の功德を讚歎し後者には大神力を讚歎する心があるのだとしている。そして、一石土の微塵すら尚数うべきこと難し、何に況んや三千大千世界の地、及び諸山の微塵の数をや、との質問に対し、声聞辟支仏の智慧、尚知ること能わず、何に況んや凡夫をや。是の事は諸仏及び大菩薩のみ知る所なり、とし、

如<sub>レ</sub>法華經說<sub>一</sub>。譬<sub>レ</sub>喻三千大千世界地及諸山末以為<sub>レ</sub>塵。東方過三千世界<sub>二</sub>下<sub>一</sub>一塵。如<sub>レ</sub>是過三千世界<sub>二</sub>復<sub>下</sub>一<sub>一</sub>塵<sub>一</sub>。

如<sub>レ</sub>是<sub>二</sub>尽三千世界諸塵<sub>一</sub>。仏告<sub>三</sub>比丘<sub>一</sub>是微塵数世界算辭量可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>。諸比丘言。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>。仏言。所<sub>下</sub>可<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>微塵<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>微塵<sub>一</sub>諸國。尽皆末以為<sub>レ</sub>塵。大通慧仏出世已來劫数如<sub>レ</sub>是。如<sub>レ</sub>是無量恒河沙等世界微塵。仏大菩薩皆悉能知。何況一恒河沙等世界。<sup>(28)</sup>

としている。すなわち、衆生の善法の果報を楽しむ者のために仏は大神力を示したもので、法華經化城喩品の大通智勝如来の三千塵点劫の説示を、そのことを証するために引用しているといえるであろう。

『大智度論』における法華經の把握(望月)

妙法華經と梵文法華經とが、大通智勝如来 Mahābhīṣṭāna-bhīḥū-tathāgata の寿命について述べる表現は、  
 おおむね『大智度論』の引用するところに似ているが、ただ引用の後半の「尽皆末以為塵」の箇所は、妙法華經に  
 おいては「尽末為塵一塵一劫」として塵点劫が示されており、梵文法華經では「śakyam punar bhikṣavas teṣāṃ  
 loka-dhātūnāṃ kena-cid ganakena vā ganaka-mahā-mātreṇa vā gaṇanayā paryanto 'dhigantum yeṣu  
 vopaniṣṭvāni tāni paramānu-rajāmsi yeṣu vā nōpaniṣṭvāni (比丘たよよ、それらの最も微細な塵がおかれた  
 り、おかれなかつたりしたそれらの世界を、誰か数学者か大算者が計算によって、正しくつくし知ることが出来るだ  
 ろうか)」とされているだけで、『大智度論』の引用に近い。そして引用末尾の如来の寿命を悉知しているとするところ  
 ろは、妙法華經は「如来知見力」を以ての故にとしており、梵文法華經は、「tathāgata-jñāna-darsana-balādhāna  
 (如来の知見力を執すること)」となしているから、塵点劫を知るためには如来の知見力が必要なことを示している。  
 すなわち『大智度論』が三千塵点の数を知らんと欲せば、般若波羅蜜を学すべしといひ、そのような数が算せられる  
 わげがないので不可信という質問に対して、法華經の説示が語られるのであるから、凡夫の智から如来の知見力への  
 転換として般若波羅蜜を捉らえているかと思われる。

(7)又、『大智度論』卷三十二は、經の菩薩摩訶薩は一毛をもつて三千大千世界中の諸の須弥山王を挙げ、他方無量の  
 世界に擲げるところをとりあげて、菩薩は何を以つての故に須弥山及び諸山を挙げて他方の世界に過着するののかとの  
 質問を設け、菩薩の力は能く之を挙げることを明すのみで、菩薩は仏が当に説法をなすが故に、先ず三千大千世界を  
 莊嚴し、諸山を除いて地を平整ならしむ、のだとし、

如三法華經中説。仏欲集諸化仏一故先平三治地。

と法華經に闡説し、希有の事を現じ衆生をして見せしめんと欲するのだ、としている。<sup>(82)</sup>

この化仏（分身仏）來集は、法華經見宝塔品が示すところであるが、妙・梵兩法華經ともに「平治地」といわれた娑婆世界のありさまを、細かく具体的に表現している。そして、『大智度論』の須弥山等の諸山を他方の世界に過着させるのに対し、

無三大海江河及目真隣陀山摩訶目真隣陀山鉄罍山大鉄罍山須弥山等諸山王。通為一仏土。宝地平正。<sup>(83)</sup>

として、諸山がなく通一仏土で宝地平正だとしている。梵文法華經は Kala, Muclinda, Mahamuclinda, Cakra-vada, Mahacakra-vada, Sumeru の山々がなく、川も天・人・阿修羅・地獄 niraya 畜生 tirayyoni やヤマ yama もなく整えられ、仏国土は瓊離からなり云々と続けられて、平正・平治地にあたる語はない。<sup>(84)</sup>しかし五百弟子受記品の「地平如掌」<sup>(85)</sup>にちがひは、samam pari-tala-jātam<sup>(86)</sup>（手の平のように平で）として仏国土を表現しているから、仏国土は地平正というのは定着していたものと思われる。したがって、地平正は仏の説法の現場面を表現するために示されるものであるとの立場を示し、そのために法華經が引用されたものと思われる。

(8) 『大智度論』三十三巻は、菩薩摩訶薩は、一切の声聞辟支仏の前にあること、諸仏に給侍すること、諸仏の内眷属たること、大眷属を得ること、菩薩の眷属を得ること、浄報大施を得ることを欲せば、般若波羅蜜を学すべしとの經の語をうけて、若し菩薩は未だ漏尽を得ずんば、云何ぞ漏尽の聖人の前に在るや、との質問を設け、菩薩について言及している。

即ち、菩薩は功德智慧大なるが故に、初発意の時すでに一切衆生の前にあり、世々に常に大いに声聞辟支仏を利益

すとし、衆生は菩薩の恩を知るが故にどこにても尊重し、菩薩はどのような場にも衆生を利益すとし、舍利弗・目犍連等の聖人、弥勒・文殊師利等の菩薩は大眷属であり、更に、仏には無量無辺阿僧祇の一生補処の菩薩が前に在って導き、後に従って出すとして、

又如<sub>二</sub>法華經說<sub>一</sub>。從<sub>レ</sub>地涌出菩薩等皆是内眷属大眷属<sub>(37)</sub>。

と述べている。従地涌出は明らかに従地涌出品の説示を意味している。妙梵両法華經は、出現に関して、

娑婆世界三千大千国土皆震裂。而於<sub>二</sub>其中<sub>一</sub>有<sub>二</sub>無量千万億菩薩摩訶薩<sub>一</sub>同時涌出

iyam saḥā-loka-dhātuh samantāt sphuṅṅitā viśphuṅṅitā 'bhūt tebhyaś ca sphoṅṅāntarebhyo bahūni bodhi-sattva-koṭi-nayuta-śata-sahasraṅy uttiṣṭhante sma<sub>(38)</sub>

(この娑婆世界は一面に裂け開いて、その裂け目から百千万億那由佗という沢山な菩薩が出現した)

としており、この菩薩たちが積尊と旧知であることを示し、弥勒菩薩等は、地涌菩薩を昔より已來、見ず聞かず(adṛṣṭa-pūrva, aśrūta-pūrva)と質問し、積尊は地涌の菩薩は私が教化したものだとし、

我今說<sub>二</sub>実語<sub>一</sub> 汝等一心信 我從<sub>二</sub>久遠<sub>一</sub>來 教化是等衆

anāśravā bhūta iyaṃ mi vācā śruṅṅitva sarve mama śradadhadhvam | evaṃ ciraṃ prāpta mayā 'gra-  
bodhi paripācītās cāti mayāiva sarve ||<sub>(39)</sub>

(この淨らかで真実の私の言葉を聞いて、一切私を信ぜよ、このように私が最高の覚りを得たのは遠い以前だ、一切のものを私が成熟させた)

としている。遠い以前、久遠は如来寿命品における久遠実成に展開するものだが、久遠実成の生命の流れの中におい

て、地涌菩薩が教化されたもので、八十年という有限な中ではないことを法華経は示している。『大智度論』が地涌菩薩は内眷属・大眷属だというのは、久遠実成の中で考える時に、認めうることを意味しているであろう。

(9) 『大智度論』卷三十八は、鈍根とは二十二根の中の何者か是なる、との質問に対し、慧根能く諸法を觀するも久しく禅味を受著するを以つての故に鈍なり、信等の五根は皆道法を助成するも受報著味を以つての故に鈍なり、菩薩は清淨の福德智慧の因縁の故に十八根皆利なるも罪の故に則ち鈍なり、と有人の意見をそれぞれ照介した上で、

眼等六根如法華經說<sup>(40)</sup>

と述べている。

法華経の中で眼等の六根にふれているのは法師功德品であり、そこでは法華経を受持・誦・誦・解説・書写する人は、八百眼功德・千二百耳功德・八百鼻功德・千二百舌功德・八百身功德・千二百意功德を得、六根を莊嚴し皆清淨ならんとせられている。<sup>(41)</sup>ここでは法華経に対する五種法師の行が六根をして莊嚴し清淨ならしめるとしていることが明白であるが、『大智度論』は前述の引用文に続いて、命根は老病等のために悩まされず安隱に樂を受く、是を命根の利となす、と利なることを種々挙げ、利と相違するが故に鈍なり、としているから、「眼等六根如法華經說」で表現しようとしたものは、利であるということなのだろうと思われる。

(10)そして又、卷三十八は、いかなるを劫と名づくるやの質問に対し、百由旬四方の城と芥子、百由旬四方の石を磨す故話を挙げ、時の中の最小なるは六十念中の一念、大いなる時を劫と名づくとし、劫には大劫小劫の二種があるとし、法華経に闡説した有人の説を示している。それは

『大智度論』における法華経の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

時節歲數名爲二小劫一。如三法華經中說二。舍利弗作三時正法住レ世二十小劫。像法住レ世二十小劫。仏從三味起。於三六十小劫中二說三法華經一。是衆小劫合名爲二大劫一。<sup>(42)</sup>

としている。これは有人の説であるから、そのまま『大智度論』の説示とは出来ないが、妙法華經は

華光仏壽十二小劫……正法住レ世三十二小劫。像法住レ世亦三十二小劫。<sup>(43)</sup>

とし、梵文法華經は

Padmāprabhasya-tathāgatasya dvadaśantara-kalpā āyus-pramāṇam……dvātriṃśad-antara-kalpān saddharmaśāśyati | tatas tasya tasmīn sadbhārma-kṣīṇe dvātriṃśad-antara-kalpān sadbhārma pratir-  
ūpakāṣ śāśyati<sup>(44)</sup>

（華光妙來の壽命は十二中劫……正法は三十二中劫続くであろう、正法滅尽の後、像法（正法に似た）は三十二中劫続くであろう）

としているから、正法・像法の続く劫數に關し、『大智度論』と妙梵兩法華經の表現とは非常に異なっていることが解る。尚、正法華經はこのところを「正法像法住二十中劫」<sup>(45)</sup>として華光如來の壽命を除いた劫數では、『大智度論』の表現と一致している。これがどのような理由によるものか解らないが、仏が六十小劫の中において法華經を説くという『大智度論』の説示は、以下に述べるところの序品第一の表現と合一している。<sup>(46)</sup>又、『大智度論』は劫には大小の二劫があるとしているが、正・梵兩法華經は中 antara 劫とし妙法華經のみ小劫として一致しているのも疑問であろう。



(10) 『大智度論』卷五十は、仏すでに須菩提の所問を知る、今何を以て更に稱して答うか、との質問に対し、この摩訶般若波羅蜜經は十萬偈・三百二十萬言あり、四阿含と等しきなり。これは一坐に説き尽すに非ずとし、二事は時を異にし日を異にすとし、声聞法の中には不可思議の事あることなく、一日一坐の中に説き尽すことを得ず、との有人の言に対し、仏は無礙解脫あり、菩薩は不可思議三昧あり能く多時をして少時と作さしめ、少時を多時と作し、亦能く大色を以て小に入れ小色を大と作すとし、法華經に闕説し

又如六十小劫説法華經一人謂從日乃至食<sup>(47)</sup>

と答えてゐる。

これは大乘と一切智に言及しそこにおける菩薩の心のあり方にふれたものだが、六十小劫という長い時間も從日至今と思われたという記述は、法華經では序品の中に見られる。すなわち、日月灯明如来は三昧より起ち妙光菩薩によせて大乘經の妙法蓮華教菩薩法仏所護念と名づくるを説き、六十小劫座を立たず、

時會聽者亦坐三二劫。六十小劫身心不<sub>レ</sub>動。聽<sub>レ</sub>仏所説<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>食頃<sup>(48)</sup>

とのべており、梵文法華經は

sā ca sarvāvati parśad ekāsane niṣṇā tām śaṣṭy-antara-kalpās tasya bhagavato 'ntikād dharmam  
śrōti sma | na ca tasyām parśady eka-sattvasyāpi kāya-klamatho 'dhūn na ca citta-klamathau<sup>(49)</sup>

(すべての集った人々は同一の坐にて六十中劫の間、この世尊の法を面前で聞いた、かの集った人々の中では一人として身体の疲労や心の疲労がなかった。)

とのべて、從日至今、謂如食頃を心の疲労 citta-klamathā がなかったと抽象的のべている。心の疲労がないとは

『大智度論』における法華經の把握(續頁)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

心が緊張し充実していることを示すから、短い時間に感じたということでは差はないと思われるが、法華經はこれを説法の場面に使用しているのに、『大智度論』は經典に対する菩薩の不可思議三昧の力の説明に使用している。

(4) 『大智度論』卷七十九は、

仏亦名為<sub>レ</sub>宝。亦名為<sub>レ</sub>無上福田。若人從<sub>レ</sub>仏種<sub>三</sub>善根。必以<sub>三</sub>乘法<sub>二</sub>入<sub>三</sub>涅槃<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>虛。如<sub>三</sub>法華中説<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>人或以<sub>三</sub>一華<sub>二</sub>或以<sub>三</sub>少香<sub>二</sub>供<sub>三</sub>養於<sub>レ</sub>仏。乃至一稱<sub>三</sub>南無<sub>二</sub>仏。如是等人皆當<sub>三</sub>作<sub>レ</sub>仏。

として、有人の但五波羅蜜を行じ作仏せんと欲する時、乃ち空を觀ず、何ぞ用いて常に般若波羅蜜の知り難く得難き空行を行ぜんや、との質問を挙げている。これに對しての答は、要す<sub>三</sub>乘を得て涅槃に入るとも、まさに了了に六波羅蜜を行ずべし、一切種智を了了に行ずるが故に疾く仏道を得るのだとなしている。

法華經の方便品は

是故舍利弗 我為設<sub>三</sub>方便<sub>一</sub> 説<sub>三</sub>諸<sub>レ</sub>苦道<sub>一</sub> 示<sub>レ</sub>之以<sub>三</sub>涅槃<sub>一</sub> 我雖<sub>レ</sub>説<sub>三</sub>涅槃<sub>一</sub> 是亦非<sub>三</sub>真滅<sub>一</sub> 諸法從<sub>レ</sub>本來 常自寂滅相 仏子行道已 來世得<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>仏 我有<sub>三</sub>方便力<sub>一</sub> 開<sub>三</sub>示<sub>三</sub>乘法<sub>一</sub> 一切諸世尊 皆説<sub>二</sub>一乘道<sub>一</sub>……

と説示し、更に若し人が塔廟・宝像及び画像において華香幡蓋を以つて敬心に供養す、若し人散乱の心乃至一華を以つて画像に供養せば漸く無數の仏を見る、塔廟の中において一たび南無仏と稱うれば皆已に仏道を成ず等々<sup>(5)</sup>と示している。梵文法華經は

neśam aham Śārisutā upāyaṃ vadāmi duḥkhasya karotiṃ antam | duḥkhena sampiḍita dṛṣṭva sattān  
nirvāna tatpāpy upadarśayāmi || evaṃ ca bhāṣāmy ahu nitya-nirvṛtā ādi praśāntā imi sarvadharmāḥ |

caryām ca yo pūrayi buddha-putro anāgate dhvāni jino bhaviṣyati || upāya-kausālya mamāiva-rūpaṃ  
yat triṇi yānāny upadaśasāyāmi | ekaṃ tu yānaṃ hi nayaś ca eka eka c'iyāṃ deśana nāyakānām ||

(舍利弗よ、私は彼等に苦を滅せよと方便を語り、苦に遭っている衆生らを見て滅度を見せる。このように一切の法は最初から寂靜で常に滅度していると私は語る。仏の息子らは行をみだし未来世にジナとなるであろう。三乗を現わすのは私の善巧方便である。しかし、実に一乗であり、道理は一つであり、指導者の教えも一つである)

とし、乱れた心であっても一本の花を捧げ繪像に供養しても幾万の仏に順次にお会い出来、一度だけでも南無仏と唱えれば最高の菩提に到達する、とせられている。

すなわち『大智度論』が質問の中で引用した法華經説は、三乗を説いて来たが実は一仏乗だけであるとする説示における表現のみをとったものであるといえよう。

④ 『大智度論』卷八十四は、曾つて仏の功德の能く人の老病死の苦を度するを聞き、若くは多く若くは少く供養し、及び名字を称すれば、無量の福を得、亦苦を畢つて尽きざるに至るとした上で、須菩提の世尊よ、若し諸法実相は壞すること無きが故に二仏異なること無しとせば、今仏分別して諸法は是れ色、是れ受想行識、乃至是れ有、是れ無為法なりと説くは、まさに諸法の相を壞すること無きや、との質問を挙げて、仏は種々に分別して諸法を説くと雖も、但、言説を以つて衆生をして解を得、心に所著すること無からしめんと欲す。若し二仏共に語るも諸法の名字を説くべからず。衆生は仏に及ぶ者なく牽引して解せしめんと欲するを以つての故に是は善、是は悪と説くのみ、と答え、更に

『大智度論』における法華經の把握(望月)

如<sup>二</sup>法華經說<sup>一</sup>火宅<sup>一</sup>以<sup>三</sup>三乘<sup>二</sup>引<sup>一</sup>出諸子<sup>一</sup>。但以<sup>二</sup>名相<sup>一</sup>說<sup>二</sup>諸法<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>壞<sup>三</sup>第一義<sup>一</sup>。

とし、名相を以つて衆生のために説くと雖も実事有ること無くんば、まさに虚妄なること無からんや、との質問に對し、聖人は世俗に随つて言説するも、中において名相に著する処有ること無し、仏は此の中に自ら因縁を説く、凡夫の如きは苦を説かば名に著し相を取る、諸仏及び弟子は口に苦く説いて心に著せず等と答えている。<sup>(83)</sup>

二仏とは真仏・化仏のことであり、供養等をなすものは俱に無量の福を得、仏の説法は種々に分別して説かれるも俱に第一義のための故であるとし、それを証するために法華經の譬喩品の説示を引用したものである。

妙法華經はこの箇所で、

如<sup>レ</sup>彼長者初以<sup>三</sup>三車<sup>二</sup>誘<sup>一</sup>引諸子<sup>一</sup>。然後但以<sup>二</sup>大車<sup>一</sup>宝物莊嚴安隱第一<sup>一</sup>。無<sup>レ</sup>虚妄之咎<sup>一</sup>。如来亦復如<sup>レ</sup>是。無<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>虚妄<sup>一</sup>。初說<sup>三</sup>三乘<sup>二</sup>引<sup>一</sup>導衆生<sup>一</sup>。然後但以<sup>二</sup>大乘<sup>一</sup>而度<sup>三</sup>脱<sup>一</sup>之。<sup>(84)</sup>

とし、梵文法華經は

tad-yathāpi nāma Śāriputratasya puruṣasya na mṛṣā-vādo bhaved yena trīṇi yānāny upadarśayitvā teṣāṃ kumārakāṇāṃ ekam eva mahā-yānaṃ sarveṣāṃ dattaṃ sapta-ratna-mayaṃ sarvālanīkāra-vibhūtiṃ eka-varṇam evōdara-yānam eva sarveṣāṃ agra-yānam eva dattaṃ bhavet

(たとえば、舍利弗よ、かの人が三乗を示しながら、かの子供らすべてに唯一の大乘を与えた。七宝づくりですべての裝飾でかざられ、同じ色の素晴らしい乗、すべてに最高の乗を与えたからといって、かの人に嘘言があるのではない)

として、如来は方便によつて三乗を示しながら大乘によつて衆生等を涅槃させたとしても嘘言者ではないとしてい

る。

すなわち『大智度論』で第一義となされているのは、法華経では大乘 *manāyāna* のことであり、不壞は虚妄 *su-vidya* ではないということであることが解り、ともに仏の廣大無辺な力、はからいを示そうとしていることにならうであろう。

44 『大智度論』卷八十八には、若し衆生あり菩薩を割截し、或はその肉を食わば当に罪あるべし、云何ぞ得度せんや、との質問に対して、この菩薩には本願あり、若し衆生有つて我が肉を啜わば當に得度せしむべしと。經中に説くが如し。衆生菩薩の肉を食わば則ち慈心生ず。……肉を啜うを以つての故に得度するに非ず、慈心を起発するを以つての故に畜生を免るるを得、善処に生じ仏に値い得度す。菩薩有り無量阿僧祇劫において深く慈心を行じ、外物を衆生に給施するも意なお満たず、並に自ら身を以つて布施す、として

如『法華経中』。薬王菩薩外物珍宝供養<sub>レ</sub>。意猶不<sub>レ</sub>満。以<sub>レ</sub>身為<sub>レ</sub>灯<sub>レ</sub>供<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>仏。爾乃足<sub>レ</sub>満。<sup>(66)</sup>  
と、薬王菩薩本事品の説示をとりあげて闕説している。これに關し法華経は、薬王菩薩の本生たる一切衆生喜見菩薩 *Sarvasattvapriyadarśana* の故事をとりあげ、この菩薩が乘つて苦行をなし、仏を供養した上で、

我雖<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>神力<sub>レ</sub>供<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>仏。不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>身供<sub>レ</sub>養。

と考へ、自ら身を灯した時に諸仏が、善哉善哉、これ其の精進なりとし、

以<sub>レ</sub>……如<sub>レ</sub>是等種種諸物<sub>レ</sub>供<sub>レ</sub>養。所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>及。仮使<sub>レ</sub>国城妻子布施亦所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及。善男子。是名<sub>レ</sub>第一之施<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>諸施中<sub>レ</sub>最尊最上。以<sub>レ</sub>法供<sub>レ</sub>養諸如来<sub>レ</sub>故。<sup>(67)</sup>

『大智度論』における法華経の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

としており、梵文法華經もまた

na tatha rddhi-prātihārya samdarśanena bhagavataḥ pūjā kṛtā bhavati yathātmabhāva-parityageneti |  
... idam tat kula-putrāgṛa-pradanam na tathā rajya-parityāga-dānam na priya-putra-bhāryā-parityā-  
ga-dānam | iyaṁ punaḥ kula-putra viśiṣṭāgṛā varā pravaraḥ prañiā dharmā-pūjā yo 'yaṁ ātmabhāva-  
parityāgah |  
(82)

（神通力の奇跡を示して世尊への供養をしたとしても、自分の身体を捨てるには及ばないと。……善男子よ、これは最高の布施であり、王位を捨てて布施しても、愛する息子や妻を捨てて布施しても及ばない。亦、善男子よ、自分の身体を捨てることは、最勝最高、最妙、上妙の法供養である。）

としており、同様の意味を伝えている。すなわち『大智度論』が外物の珍宝となしているのは、単に珍宝だけではなく、自分の身体以外の愛妻・愛子をも含むことになるが、人間が本当に愛するものは自分の生命だということを暗示するのであろうか。『大智度論』は布施に二つありとし、外物の布施と身を以っての布施として、後者が勝れていることを説くのは論を待たないが、この捨身供養は菩薩の本願慈心によるとするが、薬王菩薩の本生の生きざまが影響したものであろう。

85 『大智度論』卷九十三は、

一切仏若人好心聞レ名皆当レ至レ仏。如レ法華經中説。福德若大若小皆当レ作レ仏。<sup>(85)</sup>

との質問を挙げている。妙法華經の方便品には

若聞い法布施 或持戒忍辱 精進禪智等 種種修福徳<sup>(8)</sup> 如是諸人等 皆已成<sup>(9)</sup>仏道<sup>(10)</sup>  
とあり、梵文法華経には

ye cāpi sattvās tahi teṣa sammukhaṃ sīrṇvanti dharmaṃ atha vā śrūtāvināḥ | dānaṃ ca dattaṃ caritaṃ  
ca śīlaṃ kṣāntyā ca saṃpādita sarva-caryāḥ || virye ca dhyaṇe ca krādāhikārāḥ prajñāya vā cintita eti  
dharmaḥ | vīriyāni puṇyāni kṛtāni yehi te sarvi bodhiya abhūsi lābhināḥ || <sup>(11)</sup>

(彼等の面前で法を説き、或は聞いた衆生等は、布施を施し、戒を持ち、忍辱の行、一切の行を成就した。精進、  
禪定への努力をなし、般若によって法が思惟され、種々な福徳がなされた。彼等の一切は菩提を得るものとなっ  
た。)

となされて、ともに六波羅蜜を行じ福徳を積んだものが仏道(菩提 bodhi)を成ずることを示している。これは『大  
智度論』の若大若小の表現とは相異があるところであるが、法華経は経巻に対する受持読誦解説書写等を強く指摘  
し、一句一偈に対してこのようなことがなされる場合でも福徳を積むことが出来、仏道を成じうることを各所で説示  
していることから、若大若小皆当作仏となされたのであろう。根本の真仏は大小の異を分別することあることな  
いからである。<sup>(12)</sup>

(10)同じ卷九十三は、上の阿鞞跋致品の中に如是相を説く、これ阿鞞跋致なり、如是相は阿鞞跋致に非ず、阿鞞跋致は  
即ちこれ畢定なり、須菩提、今何を以ってか更に問うとの質問を挙げている。これについての答の中に、般若波羅蜜  
には種々問あり、阿鞞跋致はこれ一門の中の説なり、今畢定を問ひ更に異門を問うとし、仏心の中には一切衆生、一

『大智度論』における法華経の把握(望月)

切法は皆畢定なり云云とのべた後において、

聞三法華經中說。於三仏所作少功德。乃至戲笑一稱三南無仏。漸々必當三作仏。又聞三阿鞞跋致品中有三退不退。又復聞三声聞人皆當三作仏。若爾者不レ應レ有退。如三法華經中說畢定。余經說三有退有三不退。是故今問為畢定二為三不畢定一。

として、その上で、菩薩は畢定なり、不畢定は二乘なり但だ大乘の中において畢定なり、畢定とは必當作仏なりとな63している。これによってみると、阿鞞跋致品や余經は退不退（畢定不畢定）を説くが法華經は畢定だけを説き必當作仏を説くということ迷うということであるが、法華經の方便品は、

乃至童子戲 聚レ沙為三仏塔一 如レ是諸人等 皆已成三仏道二……如レ是諸人等 漸漸積三功德一 具二足大悲心一 皆已成三仏道二

と示し、梵文法華經は

sikatā-mayān vā puna kūja kṛtvā ye ke-cid uddīśya jhāna stūpān—kumārakāḥ kṛdīṣu tatra tatra te sarvi bodhiya abhūsi lābhinaḥ || bhittiṣu puruṣā ca kumārakā vā sarve ca te kārūṇikā abhūvan | sarve pi te tārayi prāṇi-koyāḥ samādapentā bahū-bodhisattvān ||  
(62)

（又、幼児らが遊びにおいてそこにシナのために砂づくりの塔をつくる、彼等の一切は菩提を得るものとなった。大人でも幼児でも壁に（像をかけば）一切の彼等は慈悲あるものとなり、幾千万の生命あるものを救い、沢山な菩薩たちを導いた）

であり、妙法華經と梵文法華經とでは微妙な相異が認められるが、大意においては大差なく、僅かな功德でも成仏道



となることを示している。この皆已成仏道は一仏乗の開頭に起因するのであるが、『大智度論』がふれる法華経中の説はそのことを意味していると思われる。

(の更に卷九十三は、菩薩は退して不畢定といい、ある時には菩薩は畢定して不退なりと仏はいうが、何れが実であるかとの問に對し、二事みな実なりとし、阿耨多羅三藐三菩提を懈怠し牢固ならざる者、かくの如き人は声聞道に従つて得度し、而も声聞を求めず久しく生死の中において苦を受くべきであるから、發心するものは恒河沙の如きも、阿鞞跋致を得るものは若は一若は二と説き、大悲心薄く自ら身を愛し重んず、この人は仏は得がたく多く退する者ありと聞いて、我は仏を得ること能わずと思ふ人のために、

為是人一故説三一切菩薩乃至初發心皆畢定。如法華經中説<sup>(66)</sup>。

となしてゐる。この法華經中説に關し、妙法華經の序品の末偈の

諸人今當<sup>(67)</sup>知 合掌一心待……諸求三乘一人 若有疑悔者一 仏當<sup>(67)</sup>為除斷 令<sup>(67)</sup>三<sup>(67)</sup>尺無<sup>(67)</sup>有<sup>(67)</sup>余<sup>(67)</sup>

の句が、それに該当すると思われている<sup>(68)</sup>。これに對する梵文法華經は、

pratyatā sucitā bhavatha kṛtāñjali bhāṣisyate loka-hitānukampī | .....yeśān ca samdeha-gati 'ha kācid ye saṁśaya yā vicikitsa kā-cit | vyapanesyate tā vidurātmajñānān ye bodhisattvā 'ha bodhi-prast-hitāh ||<sup>(69)</sup>

(よき心で自制し、合掌せよ、世間のために慈悲深き人は(法を)説く。……何か菩提にむかう菩薩たちが、この世で不確定で疑いや惑いがあるならば、賢者は自分の子供らのためにとり除くであらう。)

となされており、ともに仏を一心合掌する人々に対して仏が疑惑等を断ち切られることを示している。そしてこの表現が『大智度論』が法華經中説としたものだと思われる。

（8）同じ卷九十三は更に、阿羅漢の先世の因縁にて受くる所の身は必ずまさに滅すべし、何処にか住在して仏道を具足するや、との質問に対して、

得<sub>二</sub>阿羅漢<sub>一</sub>時。三界諸漏因縁尽。更不<sub>レ</sub>復生<sub>二</sub>三界<sub>一</sub>有<sub>二</sub>淨仏土<sub>一</sub>出<sub>二</sub>於<sub>二</sub>三界<sub>一</sub>。乃至無<sub>二</sub>煩惱之名<sub>一</sub>。於是国土仏所<sub>一</sub>。

聞<sub>二</sub>法華經<sub>一</sub>具<sub>二</sub>足<sub>一</sub>仏道。如<sub>二</sub>法華經説<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>羅漢<sub>一</sub>若不<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>法華經<sub>一</sub>自謂<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>滅度<sub>一</sub>。我於<sub>二</sub>余国<sub>一</sub>為<sub>二</sub>説<sub>二</sub>是事<sub>一</sub>。汝皆当<sub>二</sub>作<sub>二</sub>仏<sub>一</sub>。

と示している。この文の後半のところは法華經の説示となされているが、化城喻品は、この諸の衆生にして今、声聞地に住することある者に、我常に阿耨多羅三藐三菩提を教化す。この諸人等はまさにこの法を以って漸く仏道に入るべし、とした上で、

我滅度後。復有<sub>二</sub>弟子<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>是經<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>覺<sub>二</sub>菩薩所行<sub>一</sub>。自於<sub>二</sub>所得功德<sub>一</sub>生<sub>二</sub>滅度想<sub>一</sub>。当<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>。我於<sub>二</sub>余国<sub>一</sub>作<sub>二</sub>仏<sub>一</sub>。更有<sub>二</sub>異名<sub>一</sub>。是人雖<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>滅度之想<sub>一</sub>入<sub>二</sub>於<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>。而於<sub>二</sub>彼土<sub>一</sub>求<sub>二</sub>仏智慧<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>是經<sub>一</sub>。唯以<sub>二</sub>仏乘<sub>一</sub>而得<sub>二</sub>滅度<sub>一</sub>。

として、一切衆生をして作仏させることをのべている。梵文法華經は、声聞の地位にいたるものが、無上等正覚に向つて成熟せしめられているとして、

ye ca mama parinirvāṣyānāgāte dhvani śrāvakā bhaviṣyanti bodhisattva-caryām ca śroṣyanti na

cāvahotsyante bodhisattvā vayan itī | kim cāpi te bhikṣavaḥ sarve parinirvāna-saṃjñinah parinirvās  
yanti | api tu khalu punar bhikṣavo yad aham anyāsu loka-dhātusv anyonyair nāmadheyair viharāmi  
tatra te punar utpatsyante taḥgata-jñānaṃ paryesaṃāṅś tatra ca te punar evātām kriyām śrośy-  
ante | ekam eva taḥgataṅgāṃ parinirvāṅgāṃ nāsty anyad dvitīyaṃ ito bahir nirvāṅgāṃ |  
(2)

(私が涅槃に入った未来の世において声聞らがいるであろうが、彼等は菩薩の行を聞いても、我々が菩薩なのだ  
覚ることが出来ないであろう。比丘たちよ彼等の一切は涅槃の想いをいただき、涅槃に入るであろう。しかし、実  
又、比丘たちよ、私は他の世界において異った名前で住む時、彼等は如来の智を求めてそこに生まれるであろう。  
そして又、彼等はこれを聞くであろう。如来たちの涅槃は一つであり、他に第二の滅度は存在しない、と。)

として、*parinirvāṇa* 以外は真の涅槃ではなく、それこそが求めらるべき仏の道であることを示している。即ち、声  
門のままに滅度した者のためには、仏が異名をもってその国に生じ作仏を得せしめようというのが法華經の説くこと  
ろであり、『大智度論』の説示もそれをうけていることを知りうる。

以上は『大智度論』の記述中に法華經の説示が引用されるか、その句の要旨がのべられているところであるが、こ  
の外、三箇所において法華經についての指摘がみられる。

(四)『大智度論』卷五十七の中に、無疑と決了と何の異りかあるやとの問に對し、三宝を信するが故に是れ無疑、智慧  
究竟の故に是れ決了なり、として、經の発心して阿耨多羅三藐三菩提心を行じ、菩薩道を行ずるも、是の衆生は般若  
波羅蜜の方便力を遠離するが故に、若は一若は二、阿鞞跋地に住し、多くは声聞辟支仏地に墮す、……諸余の善法も

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

て般若波羅蜜の中に入る、をうけて、

諸余善法入<sup>二</sup>般若波羅蜜<sup>一</sup>者是諸余經。所謂法華經密迹經等。十二部經中義同<sup>二</sup>般若者<sup>一</sup>。雖<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>般若波羅蜜經<sup>一</sup>。然義理即同<sup>二</sup>般若波羅蜜<sup>一</sup>。

としている。即ち、經にいう諸余善法とは諸余の經で、法華經もその中に入り、ことさら般若波羅蜜といわずとも義理は同一なのだとしていることがわかる。妙法華經の分別功德品は、一念信解の功德をのべるに際し、壽命長遠を聞き一念信解をする人の功德は限量あることなく、

於<sup>二</sup>八十萬億那由他劫<sup>一</sup>。行<sup>二</sup>五波羅蜜<sup>一</sup>……除<sup>二</sup>般若波羅蜜<sup>一</sup>。

この功德をもって先の功德に比べても、百分千分百万億分の一にも及ばない<sup>(76)</sup>として、一念信解に対する功德を賞讃しているが、梵文法華經も同様である<sup>(76)</sup>。

ここで何故に法華經が除般若波羅蜜、virahitah prajñā-paramitayaとなしたのかについては詳論をさけるが<sup>(76)</sup>、施護訳の『仏母出世三法藏般若波羅蜜多經』には、

於<sup>二</sup>此般若波羅蜜多<sup>一</sup>發<sup>二</sup>信解心<sup>一</sup>。自當<sup>レ</sup>受持說誦記念。後為<sup>二</sup>他人<sup>一</sup>廣說<sup>二</sup>流布<sup>一</sup>。普令<sup>二</sup>衆生<sup>一</sup>得<sup>二</sup>大善利<sup>一</sup>。使<sup>二</sup>其正法<sup>一</sup>久住世間也。……此善男子善女人得<sup>二</sup>福甚多<sup>一</sup>。

とあり、『八千頌般若經』Asiasāhasikāprajñāpāramitā-sūtram とは、

ya imāṃ prajñāpāramitāṃ abhistraddadhā avakalpayant adhimucya prasanna-citto bodhāya cittam utpāgha……<sup>(78)</sup>

(この般若波羅蜜を信じて信賴し、信解して心に淨信し、覺りへの心をおこし……)

とあり、更に、宗教的な心で般若波羅蜜を聞き、習い、覚え、唱え、理解し、宣べ、説き、述べ、教示し、説誦し、他人のために解説するならば、実に沢山な福徳を得るであろう、とされている。すなわち、分別功徳品がいう如来壽命長遠（法華經）に対する一念信解、更には五種法師に対するあり方と同一意趣が、般若波羅蜜に対してのべられていることを知りうる。このことは分別功徳品が一念信解の功徳をのべるに際し、五波羅蜜の功徳と対比しながら、般若波羅蜜を除外したのは、般若波羅蜜に対する行と、如来壽命長遠に対する行とが異趣のものとは捉らえられていなかった、同一意趣のものとせられていたことを示すと思われる。それ故に『大智度論』は、諸余の善法とは諸余の經であり、法華經密迹經等の十二部經の中の義は、般若に同ずるもので名づけて般若波羅蜜となさずと雖も、然も義理は即ち般若波羅蜜と同じ、となしたものであらう。

②『大智度論』卷百には二箇所にわたり法華經への言及が見られる。一は般若波羅蜜をもって仏が阿難に囑累したとする經の説示をとりあげて、阿難は声聞人であるのに、阿難に般若波羅蜜を囑累し弥勒等の大菩薩にしなかつたのは何故かとの質問を設け、阿難は常に仏に侍し聞持陀羅尼を得て、一度聞けば失わず、六神通三明にして共解脱し、五百の阿羅漢の師で利益すること多きが故に囑累したのであり、諸大菩薩は仏滅後は各地に分散し、随所に度すべき衆生国土に至り、深く般若波羅蜜力を知るを以って苦しんで囑累することを須いなのだとしている。そこで更に、若し爾らば法華經、諸余の方等經は何を以ってか喜王諸菩薩等に囑累するやの問を設け、

有人言。是時仏説甚深難信之法。声聞人不<sub>レ</sub>在。又如<sub>三</sub>仏説不可思議解脱經。五百阿羅漢雖<sub>レ</sub>在<sub>三</sub>仏辺<sub>二</sub>而不<sub>レ</sub>聞。或時得<sub>レ</sub>聞而不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>用。是故囑<sub>二</sub>累諸菩薩<sub>一</sub>。

『大智度論』における法華經の把握（望月）

とし、何法か甚深にして般若に勝れる者あるか、般若を以って阿難に囑累し余の經を菩薩に囑累せるや、との間に對して、

般若波羅蜜非三秘密法。而法華等諸經說三阿羅漢受決作仏。大菩薩能受持用。譬如大藥師能以毒為藥。<sup>(79)</sup>  
となしてゐる。これは般若には共声聞説と、十方の十地に住せる大菩薩のために説くものとの二種があるためだといふ。

法華經がこの法は難解難入 gambhram durdram duranubodham (深く見がたく解しがたい)<sup>(80)</sup>であり、甚深奥少く有能信者、<sup>(81)</sup> dūśraddadheya yas teṣaṃ deṣito 'dya vināyaka (指導者よ、彼等の信じ難いものが今日説かれた)であるということを随所に示してゐるところは周知のことであり、方便品では仏が法華經を説示しようとした時、座にあつた五千人の増上慢が座を起ち退去したことをすら示してゐる。そして又、声聞らに授記したことも知られてゐるから、『大智度論』は、このような法華經のあり方を捉らえて論を展開したものであらう。

同じ卷百の末に近く『大智度論』は、仏が阿難にこの般若波羅蜜を囑累せば、仏の般涅槃の後に阿難は大迦葉と共に三藏を結集するに、この中に何を以ってか説かざりしや、との質問を挙げ、摩訶衍は甚深にして難信難解であり、三藏は三十万偈、摩訶衍は無量無限、法華經等の諸大經は無量無辺にして大海の中の宝の如し、云何んぞ三藏の中に入るべけんや、小物はまさに大の中にあるべし、大物は小に入ることを得ず。若し問わんと欲せばまさに言うべし。小乗は何を以ってか摩訶衍の中に在らざるやと。摩訶衍は能く小乗の法を兼ねるが故なり、<sup>(84)</sup>となしてゐる。

これは小乗と大乘との比較の中において、諸大乘經の名を挙げたもので、法華經もその中の一つとして挙名されたものである。

[註]

- (1) 大正二十五・一〇九中
- (2) 塚本啓祥「大智度論と法華經」(塚本幸男編『法華經の中國的展開』)・六一四
- (3) 大正九・三三三中
- (4) 同・三二下「作大誓願。若我成仏。滅度之後。於十方国土。有説法華經一処。我之塔廟為聽是經故。願現其前為作証明。讚言善哉。」
- (5) 同・三二下「其有欲下以我身示四衆者。彼分身諸仏。在於十方世界説法。尽還集一処。然後我身乃出現耳。」
- (6) H. Kern-B. Nanjio, *Saddharmapundarika-sūtra* 249 (『Saddha. 卷下』)
- (7) *Saddha. p. 241~2*
- (8) 平川彰「大乘仏教の成立と法華經の關係」(塚本啓祥編『法華經の文化と基盤』)三二
- (9) *Saddha. p. 240~241*
- (10) 大正二十五・一〇九下
- (11) 同・一二六下~一二七上
- (12) 塚本啓祥・前掲書・六一六
- (13) 大正九・六二上
- (14) 同・六一上中
- (15) *Saddha. p. 482*
- (16) 同 *p. 474~5*
- (17) 大正二十五・一三〇中下
- (18) 塚本啓祥「大智度論と法華經」(前掲書)六一九~六二〇参照
- (19) 大正九・五三上中 *Saddha. p. 405~408*
- (20) 同 二五・一三〇下
- (21) 同・二四九中下

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握 (續頁)

- (22) 大正九・四三上中  
 (23) Saddha. p.321~323  
 (24) 大正九・四三上 Saddha. p.320  
 (25) 同 二十五・二八〇上  
 (26) 同 九・二中  
 (27) Saddha. p.6  
 (28) 大正二十五・二九九中  
 (29) 同 九・二二上中  
 (30) Saddha. p.157  
 (31) しかし佛の中とは、[yo loka-dhātūṣu bhaveta tāsu pāpsu rajo yasya pramāṇu nāsti | raṇaṃ karitvāna aśeṣatas  
 taṃ lakṣyaṃ dade kalpa-śate gate ca || Saddha. p.158 へあり、一塵一劫の塵をばよしてん。  
 (32) 大正二十五・三〇〇中  
 (33) 同 九・三三上  
 (34) Saddha. p.247  
 (35) 大正九・二七下  
 (36) Saddha. p.202  
 (37) 大正二十五・三〇三上中  
 (38) 同 九・三九下~四〇上' Saddha. p.297~8  
 (39) 同 四一中' Saddha.p.310  
 (40) 同 二十五・三三九上  
 (41) 同 九・四七下' Saddha. p.354  
 (42) 同 二十五・三三九中~下  
 (43) 同 九・一一上  
 (44) Saddha. p.66~67



- (45) 大正九・七四中
- (46) 塚本啓祥・前掲書六二六に、これに闕説したものが見られる。
- (47) 大正二五・四二〇中
- (48) 同 九・四上
- (49) Saddha. p.21
- (50) 大正二五・六一九中
- (51) 同 九・八下〜九上
- (52) Saddha. p.48
- (53) 大正二五・六四八中下
- (54) 同 九・一三下
- (55) Saddha. p.82
- (56) 大正二五・六八二上中
- (57) 同 九・五三中
- (58) Saddha. p.406〜408
- (59) 大正二五・七二二中
- (60) 同 九・八下
- (61) Saddha. p.49
- (62) 大正二五・七二二中
- (63) 同 七二三中下
- (64) 同 九・八下〜九上
- (65) Saddha. p.50〜51
- (66) 大正二五・七二三下〜七二四上
- (67) 同 九・五中
- (68) 塚本啓祥・前掲書、六三二

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

- (69) Saddha. p.28
- (70) 大正二五・七一四中
- (71) 同 九・二五下
- (72) Saddha. p.186
- (73) 大正二五・四五六中～四六六中
- (74) 同 九・四四下
- (75) Saddha. p.332～333
- (76) 拙論「四信五品をめぐって」（『日蓮教団の諸問題』）一〇九一～一一一八参照
- (77) 大正八・五九六下
- (78) *Aśtaśaṣṭikā*, ed. by P. L. vaidya, *Buddhist Sanskrit Text*, No4, *Dorbangha*. 1960・31
- (79) 大正二五・七五四上中
- (80) 同 九・五中、Saddha. p.29
- (81) 同 十二上、同・70
- (82) 同 七上、同・39
- (83) 同 十一中、二十中～二十一上等、Saddha. p.60. 144～154等
- (84) 大正二五・七五六上中

3

以上、『大智度論』に引用される法華經の文節について、妙・梵両法華經との対比において検討を試みたが、以下、これを更に整理してみることにする。

(1) 卷七。「質疑」諸仏の法は法として自ら応に爾るべし、何を以って請うべし、諸仏が現前せば請えても、現前せざればどうして請うのか。「答」諸仏は説法するに人の請を待たずと雖も請う者は福を得等と語り、請う人なければ諸

仏は涅槃に入り説法しない者あり、と多宝如来を挙げてゐる。〔注記〕多宝如来への言及は干からび全身不散、滅度後に関してなされたもので、証明法華の普願の故に法を請えは（説法華）出現し証明することを示したものであろう。すなわち、仏は現前の有無によってとらえるものではなく、普願力を持つ故に説示を請う姿勢が肝要であることを示そうとしたものと思われる。

(2) 卷九。〔質疑〕衆生らが三惡道に墮ちてゐるのに、何故に諸仏菩薩は来ないのか。〔答〕衆生は罪重き故に見ず聞かず、とし、見仏のあり方として普賢菩薩の功德と来至とを挙げたもの。〔注記〕法華經を受持する者には衰患を除かんとの普賢菩薩の語と、普賢を念ずれば六牙の白象王に乗って来り導くとの説示をうけたもので、一心に仏を念ずることの肝要を示すために引用されたと思われる。

(3) 卷十。〔質疑〕東方の諸仏多し、どうして菩薩は中間で仏を供養し来るか。〔答〕菩薩は常に仏を敬う、諸仏は第一の福田なれば供養す。〔注記〕供養のあり方の第一なるものとして、薬王菩薩の焼身供養が挙げられたもので、供養とは一心なるものに発すべきものとして引用されたのであろう。

(4) 卷二十六。〔質疑〕仏は衆生を度せんと欲し息まざるなら何を以ってか涅槃に入るや。〔答〕仏が衆生を度すうちの第二の滅後の得度のためで、福德の因縁を種えしめるため。〔注記〕寿量品の良医の譬は、仏の救济が廣大無辺なることを示さんとして使用されたと思われる。

(5) 卷三十。〔質疑〕六道を説く理由。〔答〕五道も六道も文を廻したもので他意はない。〔注記〕法華經は五・六道のうち、六道を説いた經典として引用したもの。

(6) 卷三十一。〔質疑〕六波羅蜜の功德を讚歎せず、大力を讚えるのは何故か。〔答〕善法の果報を樂しむ者があるた

め、仏は大神力を示した。「注記」仏の大神力を示すために、三千塵点劫の説示を引用したものと思われる。

(7) 卷三十二。「質疑」菩薩は何故に須弥山等を他界に擲けることが出来るのか。「答」菩薩は力あり仏の説法のために中界を莊嚴し、地を平正ならしめるため。「注記」見宝塔品の遍為三仏土宝地平正の語は、このことをあらわすものとして引用せられたものと思われる。

(8) 卷三十三。「質疑」菩薩は未だ漏尽を得ていないのに、漏尽の聖人の前にあるのは。「答」菩薩は功德智慧大なれば、初発意の時すでに一切衆生の前にあり、一切を利益す、故に菩薩は常に仏の前にあり導き、後に従って出ず。

「注記」従後而出を証するために、從地涌出品の菩薩を挙げ、内・大眷屬として、仏と菩薩との関連を示そうとしたものであろう。

(9) 卷三十八。「質疑」鈍根は二十二根中の何か。「答」利と相違するから。「注記」利であるためには老病等に悩まされないことが肝要で、それを示すために法師功德品の六根清淨のあり方を挙げたものと思われる。

(10) 卷三十八。「質疑」いかなるを劫と名づくや。「答」時の小なるは六十念中の一念、最大なるが劫。「注記」この劫の説明に華光如来の仏寿の劫を挙げたものだが、これは有人の説としている。

(11) 卷五十。「質疑」仏は須菩提の、是の乗は何処より出で何処に住するかを質問を知る、何を以って答えるのか。「答」仏は無礙解脱あり、菩薩は不可思議三昧あり、多時を小時に小時を多時となす。「注記」仏菩薩の力は多時を少時と感ぜさせることを示すのに從日至食の法華經の説示を使用したと思われる。

(12) 卷七十九。「質疑」方便品には南無仏と称えるだけでも作仏す等とある、難知・難得の般若波羅蜜を行す必要があるのか。「答」般若には利益力功德あるが故に、当に般若波羅蜜を行すべし。「注記」ここでは質問の中で法華經

が使用されたもので、法華経の得脱の即時性に對し、般若の功德も甚大なるを説いたもので、般若の行と法華の信との同意性を示そうとしたのではなからうかと思われる。

④卷八十四。「質疑」諸法を色受想行識等と説くは諸法の相を壞することではないのか。「答」衆生は仏に及ぶ者でないので、牽引して解せしめるために善惡を説くのみ。「注記」仏は眞実のありのままを得せしめるために方便を説くもので、譬喩品の三車火宅の喩はそれを証するために引用せられたものと思われる。

④卷八十八。「質疑」衆生が菩薩を割截し肉を食わば、罪で得度しないのでは。「答」肉を食うから得度するのではなく、肉を食わせる菩薩に本願あるが故に、食したものに慈心が生じ得度する。「注記」菩薩の捨身供養は本願によるものとして、藥王菩薩品の本生がとりあげられたものと思われる。

④卷九十三。「質疑」人は好心あり仏の名を聞けば作仏すると法華経には説かれるが何故に淨國の仏のみを説くのか。「答」仏は無量無辺の光明あり、音声は十方に満つ、故にすべては同一である。「注記」仏には差異のないことを示すために、方便品の法を聞き福德を修めたものはすべて成仏道することを示そうとしたもの。

④卷九十三。「質疑」阿鞞跋致は畢定なりや否や。「答」阿鞞跋致は一門の中の説、仏心の中では一切の衆生・法はみな畢定なり。「注記」方便品が漸々積功徳を説き、阿鞞跋致品が退不退を説く故に、この質問となったのだが、法華経は畢定を説くのが本来で、すべては作仏すると、法華経が再説せられたもの。

④卷九十三。「質疑」菩薩の退不退の何れが実であるのか。「答」二事みな実なり。仏の所説はすべて実なり。「注記」仏は所聞の人の根に従って説法す、それ故、仏を得ること能わず早く涅槃をと樂う者のために、序品の説を挙げて令三尽無有レ余とし畢定を説いたと思われる。

『大智度論』における法華經の把握（望月）

⑨卷九十三。「質疑」阿羅漢が先世にうけし身は必ず滅す、何処に住して仏道を具足するのか。「答」阿羅漢は三界の因縁つきて再び三界に生ぜざるも淨仏土にあり、この仏所で仏道を具足す。「注記」阿羅漢が仏道を成ずるのは淨仏土で法華經を聞くからだとして、化城喩品の説示を挙げて説示したものと思われる。

⑩卷五十七。「質疑」無疑と決了とに何の異あるや。「答」三宝を信するが無疑、智悲究竟が決了。「注記」諸余の善法をもつて般若波羅蜜に入るものあるとし、法華經の名を密迹經等と列挙したもの。

⑪卷百。「質疑」阿難に般若波羅蜜を囑累し、弥勒等に囑累しなかつたのは。「答」阿難は仏に常隨給仕したからで、弥勒等は仏滅後に隨所で説くからである。「注記」しからは法華經等は何故に菩薩に囑累したのかについての問を挙げ、甚深難信の法であり、声聞人はいなかたし、用いられなかつたからであり、般若波羅蜜は秘密の法ではないが、法華經等は阿羅漢に決を授け作仏することを説いているからだとしている。すなわち、一仏乘であるため、すべてが作仏するとなす法華經の説示の上に立っているものと思われる。

すなわち、(5)卷三十で示される六道を説いたとする部分、⑩卷三十八で劫に関する所で、法華經にその言葉が示されるとした点を除いては、法華經説示の内容に関してふれ、『大智度論』の説示の展開に際して法華經の説示が使用されていることを知りうる。<sup>(1)</sup>このことは『大智度論』の作者が竜樹に比定されるや否やにかかわらず、作者が法華經を充分に知り得ており、論の展開の上において、それを利用したことを認めうるであろう。

〔註記〕

(1) 塚本唐祥「大智度論と法華經」(『法華經の文化と基盤』)六三五、には、直接引用は四回(内二回は部分的)、要旨の引用は九回、内容の指摘は九回にわたっている、とある。